

精米所が建ち、製茶工場、簡易水道、集積倉庫など更生部落のめざましい躍進ぶりは驚くばかり、仲よい共同作業で今年第一期陸稲もこれこの通りの大豊作」とあり、生産が順調だったことがうかがえます。

戦後、稲の増産を図るため1964(昭和39)年には国から水田高度利用三毛作が指定され、1989(平成元)年の水田耕地整備事業も行われましたが、徐々に稲の生産は減少し、1996(平成8)年には名嘉真区の稲作は消滅しました。

### 【恩納】

恩納区も代表的な稲作地域のひとつでした。

昭和の初め頃までは羽地黒穂、名護赤穂が年に一度栽培されていました。他にもち米としてアカムチニ(赤餅稻)という品種も栽培されていたそうです。やがて恩納村が台中65号の栽培を奨励すると、収穫量の少ない羽地黒穂、名護赤穂は次第に減っていきました。

1934(昭和9)年には、大城保助氏が所有する水田が献穀田<sup>\*1</sup>に指定され、献穀田御田植式が行われました。

しかし恩納区の稲作も戦後になると、土地改良や栽培作物の多様化により姿を消していきました。

### 【真栄田】

『真栄田誌』によると、真栄田区の稲作は明治から昭和の初めごろまで行われていたようです。1941(昭和16)年、親田原土地区画整理事業によって水の管理性が向上したこと、真栄田区の稲の生産量は増え、動力式精米機も導入されました。精米の手



恩納・前袋原の水田風景

間賃は金銭ではなく、精米する分量に応じて玄米で支払っていました。

1959(昭和34)年、今帰仁村に北部製糖が建設され、さらにキューバ危機により砂糖の国際価格が上昇すると、稲作からさとうきび生産に切り替えていく農家が増えました。その後、当時の羽地村稲嶺に羽地新製糖工場が建設されるとさとうきび作と稲作の規模は逆転し、真栄田区の水田はさとうきび畑に変わっていきました。

(仲村)



安富祖の水田(2018年撮影)

※1 新嘗祭に献上する米を育てるために選ばれる水田。

### 【参考文献】

- ・『恩納村誌』(仲松弥秀・1980年)
- ・『恩納字誌』(字恩納自治会・2007年)
- ・『写真集道 写真で見る恩納区のあゆみ』(字誌編集委員会・2003年)
- ・『いやしの里 名嘉真』(恩納村名嘉真字誌編集委員会・2012年)
- ・『とよむあふす』(字誌)とよむあふす」編集委員会・2001年)
- ・『花と水の里 喜瀬武原字誌』(字誌編纂委員会・2005年)
- ・『字誌 山田』(字誌山田編集委員会・2019年)
- ・『真栄田誌』(真栄田誌編集委員会・2017年)
- ・『沖縄大百科事典』(沖縄タイムス社・1983年)